

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	瀬名波 栄志
論文題目	Social Movements in the Contested Democracy: The Anti-Corruption Movements and the Pro-President Movements in the Contemporary Philippines （競合する民主主義における社会運動 —現代フィリピンにおける反汚職運動と親大統領運動—）		
（論文内容の要旨）			
本博士論文は、現代フィリピンを「競合する民主主義」と捉え、1986年の民主化（EDSA革命）以降、とくに2010年代以降において、社会運動がいかに変容し、また社会運動勢力間の連合と対立の構図がどのように変化してきたのかを実証的に明らかにすることを目的とする。フィリピンでは、EDSA革命以降、階級構造に依存した社会運動が展開され、社会運動勢力の分極化が生じてきた。2010年代以降、「一般市民」を掲げる集合的アイデンティティを軸として社会運動勢力間の連立が進んだものの、その後、集団内の同質化と集団間の差異化を強調するメタ・コントラストが顕在化し、集合的アイデンティティ境界を軸とする新たな対立が生み出されている。本論文は、フィリピンにおける主要な三つの社会運動勢力—伝統的社会運動勢力（教会・リベラル・左派）、独立活動家勢力、大統領支持勢力—に着目して分析を行う。 序章および第1章では、社会運動論およびフィリピン政治に関する先行研究を整理したうえで、民主化以降の社会運動の歴史的展開を検討する。2010年代まで、社会運動内部の分極化は主として階級を軸としていた。典型例が、汚職疑惑を理由にエストラダ大統領の弾劾を求めた中産階級中心のEDSA Dosと、それに反発した下層階級中心のEDSA Tresである。しかし、2010年に始まるアキノ3世政権による反汚職政策やソーシャルメディアの普及により、既存組織に依存しない独立活動家勢力が台頭し、階級に基づく分極化は脱活性化した。その一方で、2016年のドゥテルテ政権の成立を契機として、異なる集合的アイデンティティを有する社会運動勢力間の分極化が進行した。 第2章と第3章では、2013年の反汚職運動であるミリオン・ピープル・マーチ（MPM）を分析する。MPMは、従来の伝統的社会運動勢力ではなく、既存研究が十分に扱ってこなかった独立活動家によって主導された点に特徴がある。第2章では、独立活動家へのインタビューを通じて、その社会的背景と集合的アイデンティティの形成を明らかにする。彼らは、汚職政治家ではなく「腐敗した制度」そのものを敵として設定するフレーミングを用いることで、階級や思想の差異を抑制し、運動内部のメタ・コントラストを弱め、多様なアクターの運動への参加を可能にした。第3章では、こうしたフレーミングに加え、既存ネットワークの活用、明確なアジェンダ設定、中立的な空間の確保が、独立活動家と左派勢力との協調を可能にし、脱階級的な社会運動としてMPMが成立したことを示す。 第4章は、ドゥテルテ政権下で台頭したダイハード・ドゥテルテ・サポーターズ（DDS）を分析する。DDSは、階級を横断する支持基盤を形成しつつ、フレーミングを通じて排他的な集合的アイデンティティを構築した点に特徴がある。彼らは、エリートや			

既存政治家だけでなく、伝統的社會運動勢力そのものを「偽の民衆」と位置づけ、意図的にメタ・コントラストを強化した。とりわけ、MPMに参加していた一部の独立活動家がDDSに転じ、社會運動の経験と技法を排他的動員に転用した点は重要である。

終章では、2025年9月の反汚職抗議行動を事例として、MPM以後の社會運動の帰結を検討する。この抗議行動では汚職と戦う市民という集合的アイデンティティが共有されたものの、市民の内実をめぐる合意形成がなされず、伝統的社會運動勢力（および一部の独立活動家）とDDSのあいだで動員は空間的・組織的に分断され、衝突を招いた。本論文は、MPMが階級中心の分極化を乗り越える転換点であった一方、アイデンティティの境界を軸とする新たな対立を生み出す参照点ともなったことを示し、現代フィリピン民主主義における社會運動の可能性と限界を明らかにする。

(論文審査の結果の要旨)

本博士論文が優れている点は、主として次の三点にまとめることができる。第一に、フィリピンの社会運動に関する先行研究を丁寧にレビューしたうえで、これまで十分に注目されてこなかった独立活動家に着目し、彼らをフィリピン社会運動史の中に明確に位置づけた点である。2010年代以降、ソーシャルメディアの普及により、左派やリベラルといった伝統的社会運動組織に必ずしも依拠しない社会運動が世界的に広がってきたが、本論文は、こうしたグローバルな動向がフィリピンにおいて具体的かつ大規模な形で結実した事例として、2013年のミリオン・ピープル・マーチ (MPM) を分析している。とりわけ、本論文は、MPMを主導した独立活動家45人のうち31人に対して半構造化インタビューを実施し、彼らの社会的出自、運動を主導した動機、左派やリベラルなどの伝統的社会運動勢力との連携の実態を詳細に明らかにした。独立活動家が「腐敗した制度と戦う一般市民」という、特定の政治主体を敵としない集合的アイデンティティを共有することで、階級やイデオロギーにとらわれない多様なアクターを巻き込み、MPMを成功に導いた点を実証したことは、高く評価できる。

第二に、1986年の民主化革命 (EDSA革命) から2025年までという長期的な時間軸において、フィリピンの社会運動の変遷を体系的に描き出した点である。EDSA革命以降、反政権・反汚職をめぐる主要な社会運動として、①中産階級中心のEDSA Dos、②それに対抗した下層階級中心のEDSA Tres、③MPM、④ドゥテルテを強く支持するダイハード・ドゥテルテ・サポーターズ (DDS) 、⑤2025年9月の反汚職抗議行動という五つの局面を整理している。既存研究は、EDSA DosとEDSA Tresの対立を中産階級と下層階級の階級対立として説明してきたが、2025年の反汚職運動で顕在化したDDSと伝統的社会運動勢力 (および一部の独立活動家) との対立は、もはや階級対立としては理解できない。本論文は、この転換点をMPMに求め、社会運動が階級ではなく「汚職と戦う市民」という集合的アイデンティティを軸に再編されたことを明らかにしている。その一方で、皮肉にも、「市民」の内実をめぐるメタ・コントラストが顕在化し、DDSと伝統的社会運動勢力 (および一部の独立活動家) という新たな対立構図が生み出されたことを指摘しており、社会運動の変容を動態的に捉えた点は高く評価できる。

第三に、既存研究とは異なる角度からDDSの実像を描き出した点である。本論文は、DDSのデモへの参加観察と25人のDDSメンバーへのインタビューを通じて、DDSを「実体のないネット上の存在」や「雇われたトロール集団」、あるいは「低所得で熱狂的なドゥテルテ支持者」とする通俗的理解を相対化している。DDSは、階級を横断する支持基盤を持ちつつ、フレーミングを通じて排他的な集合的アイデンティティを構築した社会運動勢力であり、必ずしも反民主主義的とは言えない。彼らは、エリートや既存政治家だけでなく、伝統的社会運動勢力そのものを「偽の民衆」と位置づけ、意図的にメタ・コントラストを強化してきた点に特徴がある。さらに、MPMに参加していた一部の独立活動家がDDSに転じ、社会運動の経験や技法を排他的動員へと転用した過程を明らかにした点は、DDSを単なる逸脱的存在としてではなく、競合する民主主義の内部で形成された社会運動主体として再評価する重要な貢献である。

よって、本論文は博士 (地域研究) の学位論文として価値あるものと認める。また、

令和8年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。